

日本科学者会議
福岡支部ニュース
No. 294
2025 年 10 月 20 日発行

●日本科学者会議事務局

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-1-17 タカサキヤビル 5F
Tel: 03-5615-9032 Fax: 03-5844-6513

●福岡支部事務局

〒813-0021 福岡市東区みどりが丘 3-11-5
小早川義尚 気付け
<E-mail> fukuoka@jsa-fukuoka.sakura.ne.jp
<郵便振替> 福岡 01790-1-5576
<支部 HP> <http://jsa-fukuoka.sakura.ne.jp/index.html>

目次	ページ
1 機関誌『日本の科学者』送付に関するアンケートのお知らせとお願い	1
2 『日本の科学者』読書会 9 月例会（9/8）の報告	2
3 JSA 福岡 AI 問題研究会 第 1 回例会（9/20）の報告	3
4 福岡核問題研究会例会（10/25）の案内 「原爆投下及び被曝問題の法律学における扱われ方について一無視と忘却」	4
5 『日本の科学者』読書会 11 月例会（11/10）の案内 「11 月号特集：洋上風力発電の課題」	5
6 AI 問題研究会の例会（第 2 回）の案内 「生成 AI は何を生成しているか」	5
7 例会等の案内	6
7-1 福岡核問題研究会例会（10/25）の案内 「原爆投下及び被曝問題の法律学における扱われ方について一無視と忘却」	
7-2 『日本の科学者』読書会 11 月例会（11/10）の案内 「11 月号特集：洋上風力発電の課題」	
7-3 AI 問題研究会の例会（第 2 回）の案内 「生成 AI は何を生成しているか」	
8 （エッセイ）『8 月 6 日、ハレの路上にて』 今井宏昌	7

1. 機関誌『日本の科学者』送付に関するアンケートのお知らせとお願い

会員の皆様には支部事務局から郵送等で冊子体の機関誌『日本の科学者』（JJS）をお手元にお届けしています。今後の支部事務局の実務の軽減を考え、機関誌配布方法の一部見直しを検討して（（全国）幹事会と第 56 回定期大会）います。

つきましては、下記のアンケートをお願いすることとしました。

- ・引き続き、冊子体の配付を希望する
- ・電子ジャーナルの閲覧を希望する（発行の連絡を受け、自分で閲覧に行く）

アンケートはメール、郵送で支部会員の皆様にお知らせしています。下記、Google Form からアンケート記入が可能です。

<https://forms.gle/dyzDYeUWXuWb2eor5>

会員の皆様にはアンケートへのご協力をお願いします。

なお、現在 JSA のホームページ「会員専用」欄内で、『日本の科学者』を閲覧することが可能です。

（文責：支部幹事 中野 豊）

2. 『日本の科学者』読書会 9 月例会（9/8）の報告

8 月例会が参加希望者の日程が調整できなかったために、9 月 8 日(月)に『日本の科学者』8 月号（特集「社会的ひきこもり、登校拒否・不登校の今日的課題と展望」）と 9 月号（特集「学問の自由と揺らぐ基盤」）を合わせて 9 月例会を行いました。

報告は 2 つで、まず、黒澤さんが 8 月号の特集にある「ひきこもりの長期・高齢化と家族への支援 — ひきこもりつつ豊かな人生を」（著者：田中義和）を紹介されました。内容の概略は、以下の通りです。

- ・ひきこもりの長期・高齢化が進み、平均ひきこもり年数は 11 年を超える。ひきこもりの初発年齢は平均 19.7 歳で、学校での人間関係やいじめ、就職活動・職場での人間関係がきっかけとなっている。また、入学・進学、就職・移動などの機会に伴って起こる場合も多い。
- ・それに対して、公的なひきこもり支援指針は 2001 年、2010 年、2025 年と三度に渡り整備されてきたが、地域支援センターの設置は進まず、独自法がないため支援が届いていない。
- ・就労自立が困難な現実から、生き方支援論が提唱され、就労だけでなく多様な社会参加支援が求められている。ひきこもり期間を肯定的に捉え、家庭を中心とした生活充実も支援対象に含めるべきとの指摘がある。

報告を受けて、具体的に身の回りで観られる事例などうつ病や双極性障害などによる社会参加への困難などの事例も含めて討論が行われました。また、いわゆる就職氷河期の年代にそうした事例が多くなっているのではないかとの意見もだされました。

次に、小早川が 9 月号特集にある「現代の学問の自由に関する Q&A — 若い世代との対話から」（著者：羽田貴史）を紹介しました。内容の概略は、以下の通りです。

- ・学問の自由は憲法で保障され、大学教員の研究、発表、教育、学生の学ぶ自由を含む。しかし、近年、特にトルコ、インド、中国、イラン、ベネズエラ、ロシアなどで政府批判を理由に

侵害が増加している。米国でも、愛国者法による監視強化や、DEI 禁止法案、大学補助金削減などの動きが見られる。

- ・学問の自由は民主主義社会に不可欠だが、無制限ではなく倫理的責任が伴う。日本では学問の自由侵害事例が報告されており、政府や政治家の干渉だけでなく、社会からの圧力も問題となっている。日本のメディアや大学の方針では学問の自由が十分に扱われておらず、歴史的背景も影響している。

- ・学問の自由の危機の根源は、学生の自由な精神の成長より業績重視、基礎科学より実践的学問重視の風潮にある。大学教員の学問の自由に対する理解不足も問題で、大学自治と学問の自由の関係性を誤解する論文も見られる。日本の大学団体は設置形態別に分かれ、共通の利益よりも対立構造にあり、学問の自由を守る力が弱い。＊

- ・西洋思想の自由思想の歴史に触れ、日本の思想の貧弱さを嘆きつつも、それを知ることも重要だと述べている。

討論では、「アメリカの主要な大学は学問の自由の擁護を大学の方針に掲げ、教職員・学生の権利と義務、大学の責任を明記していますが、日本の大学ではどこも明記していません。」という記述に対して、日本の大学でも大学の憲章として学問の自由に言及している例も多いとして、九州大学の学術憲章や教育憲章の内容が挙げられました。また、下線部＊に関して日本の大学団体の動きとして日本私立大学連盟の「新たな公財政支援のあり方について（2024）」などの資料もあけて議論されました。

（読書会世話人代行：小早川義尚）

3. JSA 福岡 AI 問題研究会 第 1 回例会（9/20）の報告

9 月 20 日（土）14：00 からオンラインで AI 問題研究会の第 1 回例会を開催しました。残念ながら参加者は世話人の 2 名だけでした。2 名だけでしたが予定通り 2020 年に「日本の科学者」に掲載された小倉久和氏の「AI と社会 (1), (2)」について西垣と小早川がそれぞれ報告して討議しました。

「AI と社会 (1)」で提起されている問題は、以下のようなものでした。

- ・リクナビが販売した就活生辞退予想データを作り出した仕組みは、AI によるプロファイリングとスコアリング技術を用いて、過去のデータから辞退者プロフィールを抽出し、今年の就活生の辞退予想スコアを算出するものであった。そこでは、機械学習においてディープラーニングを活用し、ビッグデータで対象・対照集団の特徴を分析している。

- ・そして、Web 上で利用されている AI システムは、フィルターバブルを作り、多様な情報へのアクセスを阻害する。そのため、熟練者は統計処理によってはじかれるような異常データに気づき、新たな知見を得るが、現状の AI ではこの「ハッとする」現象を扱えず、専門家の知性を模倣する必要がある。AI はまだまだこれからである。

また、「AI と社会 (2)」では、自動運転についてとりあげて、以下のような解説がされています。

・ABS (Anti-Lock Braking Systems) などの車載システムはAI 技術の一種であり、熟練運転手の判断を学習して開発された。しかし、AI は学習データの範囲内でのみ機能し (いわゆるAI におけるフレーム問題)、想定外の状況では失敗する。

・そうした中で、自動運転車事故の責任は、日本とアメリカで異なる。日本では運転者の責任が重視される一方、アメリカでは企業責任が問われる傾向にある。

「AI と社会 (1) - (4)」は科学余話として 2019 年に執筆されており、いわゆる ChatGPT に代表される様な LLM を応用して、特に対話に特化した機能を持つ AI モデルが 2020 年以降に急速に普及する前に執筆されたものです。そのため、議論する中で様々な概念や語句の意味などに参加者の現在の理解とかみ合わない部分もありました。

また、集まりが悪かった要因についても検討したのですが、例会案内のアナウンスが例会で取り上げる具体的なテーマなどを明確に設定せず、具体的な研究会の進め方も曖昧な内容であったことも一因だったのかもしれません。次回以降は各回の研究会で話し合うテーマを具体的に案内をアナウンスすることも検討しました。

(AI 問題研究会世話人：小早川義尚)

4. 福岡核問題研究会例会 (10/25) の案内

JSA 福岡支部会員の皆さん

以下の内容でオンライン研究会を開催いたします。ご関心のある方のご参加を歓迎いたします。

オンライン 10 月例会のお報せ：

1) 日時：10 月 25 日 (土) 10：00～(12：30)

一応、当日の報告と質疑応答は 10 時～11 時とし、必要ならば、討論時間を延長し、それ以後～12 時は核・原子力問題に関連する意見交換を行うことにします。
特に意見交換の提案がなければ、その時点でオンライン研究会は終了とします。

2) 話題提供：伊佐智子氏 (久留米大学)

話題名「原爆投下及び被曝問題の法律学における扱われ方について一無視と忘却」

要旨：

原爆投下後、被曝者の実状や具体的症状は、米軍によって敷かれたプレスコードにより、ほとんど十分に報道されてこなかった。1947 年 5 月 3 日、「日本国憲法」が施行された後も、まだ占領状態にあった日本で、憲法 21 条の「表現の自由」は制限され、21 条第 2 項で禁止されている「検閲」が日本の主権回復まで継続された。

また、法律学で、被爆者らが損害賠償を訴えた民事裁判も、法学部の学生等に教育されることなく忘却されてきた。本報告では、戦後、いかに被曝問題が、日本において法律学的にも無視され、忘却されてきたかを報告したい。

3) オンライン接続情報：

Ryoji Okamoto さんがあなたをスケジュール済みの Zoom ミーティングに招待しています。

Zoom ミーティングに参加する

<https://us06web.zoom.us/j/83462181976?pwd=uCeX4c42IVppplTt1XBWdSzwRPjRgm.1>

Zoom AI Companion によるミーティングインサイトを表示

<https://us06web.zoom.us/join/ed1?muid=e455de48-254a-499d-84dd-831031b6f315>

ミーティング ID: 834 6218 1976

パスワード: 546140

(福岡核問題研究会世話人：岡本良治)

5. 『日本の科学者』読書会 11 月例会 (11/10) の案内

JSA 福岡支部『日本の科学者』11 月号（特集：洋上風力発電の課題）の読書会（11 月例会）は、下記の日時に Microsoft Teams を利用してオンラインで行う予定です。

【JSA 福岡支部『日本の科学者』読書会】

11月10日(月)14:00～ Microsoft Teams でのオンライン開催

「日本の科学者」11月号掲載論文について報告を希望される方は、JSA 福岡支部事務局（小早川：kobayakawa_fm@icloud.com）宛てに10月中を目処にメールでご連絡ください。読書会への参加は報告の有無にかかわらず自由ですので、興味のある方はふるってご参加下さい。

読書会へ参加するためのアクセス情報は、確定した開催情報と一緒に会員メーリングリストで事前にお知らせします。

なお、『日本の科学者』10月号の内容は比較的狭い分野（熱力学）に限定されているため、10月例会は中止とすることになりました。

(読書会世話人代行：小早川義尚)

6. AI 問題研究会の例会（第2回）の案内

JSA 福岡支部会員の皆さん

AI 問題研究会 第2回例会の案内をお送りします。奮ってご参加下さい。

AI 問題研究会の例会 (第2回)

日 時：2025 年 11 月 20 日（土）14:00-16:00

形 式：Microsoft Teams によるオンライン会議

Microsoft Teams へのアクセス情報：

<https://teams.microsoft.com/l/meetup-join/19%3ameeting_M2QxZTIxNmUtOTM1MS00NGM1LWIwZTUtZjNiOWJhMzNkOWY2%40thread.v2/0?context=%7b%22id%22%3a%22d7715f89-936a-4af7-bb75-a57ac99646fa%22%2c%22id%22%3a%22863bacd3-b9e9-4761-a071-aeef14cd9eef9%22%7d>

會議 ID: 455 690 901 594 4

パスワード: Qt9Bq6nb

(なお、上記の情報は、会議開催日の約1週間前にも、JSA 福岡支部会員メーリングリスト登録者宛てにお知らせします。)

内容 1：問題提起：テーマ「生成 AI は何を生成しているか」(報告者 西垣敏)

2：問題と課題についての討論

問題提起の概要：

「予測マシン」としての AI の社会実装が、一方で人間を助ける力となりながら、他方では人間の行動と精神に影を及ぼしながら、急激に進んでいる。特に Chat GPT の登場以来社会に激変を起こしつつあるのは、所謂「生成 AI」なるマシンである。更に AI は、これと並行して成功を収めた「大規模言語モデル LLM」と組むことで、人間の要望を言葉で受け、それに沿った「生成」を行うことが可能になった。

生成 AI はその開発がいま激しく競われている技術であって、AI を構成する個々のアルゴリズムも分からない所が多いし、アルゴリズムの動く根拠となる数理に不安もある。そこで、今回の研究会の学習・討論は、「生成 AI は何を生成しているか」の問いから始めることにしたい。具体的には画像生成タスクにおいて、事前に多くの画像を学習済みのマシンがどのように新たな画像を生みだせるか、と云った「汎化」の課題を見据えて、画像生成 AI の仕組みを議論する。次の書籍を参考にする。このうち(2)はかなり難解である。研究会は(3)の概説から入る。

(1)『大規模言語モデルは新たな知能か』岡野原大輔 2023 岩波科学ライブラリー 319

(2)『拡散モデル データ生成技術の数理』岡野原大輔 2023 岩波書店

(3)『生成 AI のしくみ 〈流れ〉が画像・音声・動画をつくる』岡野原大輔 2024 岩波科学ライブラリー 328

7. 例会等の案内

7-1 福岡核問題研究会 の例会

日 時：2025 年 10 月 25 日 (土) 10:00～(12:30) 時間の詳細は別項参照

様 式：オンライン開催 (オンラインアクセス情報は別項参照)

話題提供者：伊佐智子氏 (久留米大学)

話 題：「原爆投下及び被曝問題の法律学における扱われ方について一無視と忘却」

7-2 『日本の科学者』 11 月号読書会

日 時：2025 年 11 月 10 日 (月) 14:00～

様 式：オンライン (参加のアクセス情報等は別項参照)

内 容：『日本の科学者』 11 月号＜特集＞「洋上風力発電の課題」

7-3 AI 問題研究会の例会 (第 2 回)

日 時：2025 年 11 月 20 日 (土) 14:00-16:00

様 式：Microsoft Teams によるオンライン会議 (詳細は別項参照)

内 容：問題提起「生成 AI は何を生成しているか」(報告者 西垣敏)

8. (エッセイ) 『8月6日、ハレの路上にて』 今井宏昌

第二次世界大戦終結から80年となる今年、私は偶然にもサバティカル(研究休暇)を取得することができ、6月末から8月半ばまでドイツに研究滞在する機会を得た。現地では終戦80年をテーマとする様々な催しが開催されており、私も研究仲間に誘われ、ポツダムで開催された1945年をテーマとするワークショップに参加するなどした。ロシア・ウクライナ戦争やイスラエルによるガザでのジェノサイドが終息を見せず、さらには極右政党「ドイツのための選択肢(AfD)」が台頭する中にあって、この80年をどう総括すべきかという問題意識は、現地で遭遇した議論をはじめ、ドイツ社会の中に全体として渦巻いていたように思う。

80年目の8月6日は、かつての留学先であるザクセン=アンハルト州の都市、ハレで迎えた。訪問先であるハレ市立文書館は市中心部のマルクト広場に面しており、当日夕方には「左翼党(Die Linke)」ハレ支部主催のもと、ヒロシマ・ナガサキへの原子爆弾投下から80年を祈念する行動がおこなわれた。すでに前日からこの情報をSNSで入手していた私は、文書館での仕事を少し早めに切り上げ、いち傍観者として行動を見守ることにした。

ちなみにこの行動は、インターネット上での呼びかけに際して以下の文言を掲げている。「私たちの行動には、右翼急進的、民族主義的、反民主主義的スペクトラムに属する個人(特に役職者)、政党、組織、集団の居場所はありません。同様に、暴力を行使したり、ジャーナリストを攻撃したり、陰謀論を信奉したりする個人や集団、また人種主義、反セム主義、セクシズムなどの集団的敵意を表明する者に対しても、参加を拒否します。」(URL:

<https://www.dielinke-halle.de/vor-ort/termine/details/hallescher-aktionsaufruf-zum-80-jahrestag-des-abwurfs-der-atombomben-auf-hiroshima-und-nagasaki/>) 核兵器廃絶のワンイシューで広く浅く参加を呼びかけるのではなく、あくまでマルチイシューを貫くスタイルに、左翼党らしさを感じるとともに、極右襲撃の可能性に身構えたのも事実である。

ただ幸いなことに、行動はきわめて平和的に開催された。原爆の悲惨さと核兵器廃絶を訴える演説のあと、参加者全員に折り鶴が配られ、それを広場に貼り付けたピースマーク型のテープの上に飾りつける行動が始まった。参加者は当初50人程度だったが、通りすがりに興味を持ったり、話を聞いて立ち寄ったりする人が増えていき、最終的には100人を超えていた。老若男女が入り混じり、中には移民の背景をもつと思わしき中東系の青年たちもいた。子どもたちが楽しそうに折り鶴を飾りつけていたのも印象的だった。

折り鶴からピースマークが完成していく様子は、ドローンを操る青年により上空から撮影された。ロシア・ウクライナ戦争では人殺しの道具となっているドローンも、本来はこのような形で活用されるべきだろうと思った。

行動終了後、主催者に「日本から来ました。素晴らしい行動でした」と伝えて握手をしたところ、「今日は重要な日なので行動しました」との言葉が返ってきた。ヒロシマ・ナガサキが世界的にも重要な意味をもつことは当然承知していたものの、「異国での悲劇に想いを寄せ、共通の教訓にしていく」実践を今回目の当たりにすることで、それが決して当たり前のことではなく、無数の人びとの行動によって形づくられた認識であることに思い至った。忘却と歪曲の力学に抗うには、地道な行動こそ不可欠である——8月6日、ハレの路上で得た学びである。